
ジェネシス

空都アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジェネシス

【Nコード】
N5050Z

【作者名】
空都アキ

【あらすじ】
遙か先の未来で起こる人間とロボットとの戦争。

プロローグ（前書き）

あらすじとプロローグが絶望的に苦手ですががんばって書きたいと思います。

ブローグ

西暦三千年。

宇宙への夢を諦めた人類は、ロボットを作ることに力を注いだ。

その副産物として工業化学の急激な発展を遂げた。

よりよい社会を築き上げてきた人類はついに、人間と同じロボットを作ること成功した。

ロボットは全長1.8メートルの人型でスムーズな二足歩行可能としたものだった。

人間はロボットにホープと名づけ、最先端人工知能をホープに取り付け自我の確立に成功した。

その後ホープは、人間社会を生活の場とし社会の発展のために尽くしていった。

ホープを作った博士ゼラ「フォーランドはホープのために仲間を作った。

ホープの第二号機は簡単に作ることができ、人工知能を使った自我もすぐに目覚めた。

第二号機の名前はシェイクと名づけられた。

シェイクは自我を持つと同時に博士を殺害し、博士の工場研究所

をのつとり自分の為だけに動くロボットを作り世界に対して宣戦布告する。

世界同盟は宣戦布告に対し開戦する意思を示し、ロボットと人間との長い戦争ははじまりをつげた。

博士の作ったホープは人間の味方になる事を約束し制御チップ、遠隔爆破装置を自ら進んで取り付けた。

そうして世界同盟の信頼を得たホープは戦いに必要な兵器を作り出す技術者となり働き始める。
戦争が始まって百年余りが過ぎた。

百年経つと戦争の仕方も変わってくる。

シェイクの作り出す巨大ロボットに対抗するために人間は歩兵や戦闘機等による戦いから、ホープの作り出した三メートル近くある二足型兵器に乗っての戦いとなった。

ホープの作った人型兵器はライオネックと呼称された。

ライオネックにより一時的に有利に立った人間は勝利を目前にしシェイクの作った四体の巨人型兵器によってその勝利を阻まれた。

それから五十年戦況は動かず、ライオネックに乗る人間と巨人型兵器とその仲間達との戦いは続いていた。

年をとらないホープは研究に研究を続け、新兵器の開発に成功した。

新兵器とはライオネックより大きい七メートルもある第二世代人型兵器である。

ホープが新たに作り出した第二世代人型兵器はインフィニティと呼ばれた。

ライオネックと違うところは大きさだけでなく、足を強化しバーニアやウエポン等の重物の取り付けを可能とし、ナビシステムによるパイロットの能率性の向上など様々な点において違いがあった。

インフィニティは全部で五体しか作れず、世界各地からパイロットを選出しシェイクとの最終決戦に臨む。

この物語はインフィニティを駆る者達とシェイクとの戦いを語り継いだ記録である。

第一章 決意 1 - 1

夏だからといって許されることと、許されないことがある。

もし訴えることが出来るならすぐにでも裁判をおこしてやるのに。

まあ、何が言いたいかというと、とても暑い日は何日も続いている。

午前の授業を済ませた僕は午後から行われるであろう授業をさばり、授業が自分の人生にどれほどの影響を与えるのかをまじめに考え、左手で陽光をさえぎながら、熱したフライパンのようなアスファルトをゆつくりと歩く。

今は早退という身分なので、誰にも見つからないように細心の注意を払いながら、地元の人間でもめったに使わない裏道を使う。

人生からの逃避行の途中で見つけた草原に誘われるように入り、草の集団に紛れ草原の中心で僕は草のベッドに横になり青い空を漂う白い雲を見つめる。

あの雲のように何にも縛られず、何もする必要のない生活を過ごせたらどんなに素晴らしいのだろうと思う反面、風に流されてしまふ雲に流される人生なんて面白くないだろうと思ってしまう。

今の僕にとって自由のある場所なんて何処にも無い。

戦争区域から疎開して来てから一年、僕は行きたくも無い高校に通いながら自由を求め、何をするという事も無く一日、一日を社会

のルールに縛られながらルールと言う名の自由のもとダラダラと過
ごしている。

これは皮肉だ。

我ながら矛盾した生き方をしていると思うが、これで自己嫌悪に
落ち込むどころか、まあ人間なんてそんなものだろうと、自己完結
してしまう僕はなんて凄いのだろうと、自我自賛してしまう何て事
は無いが実際細かい事を考えていたらきりが無い。

話は変わるが、一年前に僕が疎開して来たのは日本の縁若町と呼
ばれる田舎町である。

田舎だけに特に何も無い、だから敵に狙われない、いつも命の保
障がない危険な生活に身を置いていた都会に比べれば、絶対の保証
はなくとも狙われづらいこの街は僕にとってはある意味楽園のよう
な所でもある。

毎日のように避難訓練をする必要も無く、強制的に体力作りや筋
トレをしなくてもいい。

疎開までしなくてはならない戦争も開戦からもう百五十年余り経
っている。

それにもかかわらずいまだに戦争が終結していない事は信じ難い、
もうそろそろどちらかが力尽きて倒れる頃だろう。

地球の資源には限界があり機械を作る材料や人間の命にも例外はな
い。

昔あった核爆弾という物があればこんな戦争はとつくに終わって

いるはずだ。

核というものは千年も昔に全て太陽に破棄され製造も禁止になり、今はその威力の恐ろしさや地球にもたらす被害などはメモリービューーや歴史の教科書等に名前を残すだけになっている。

一発放つと一瞬にして緑の大地や文明の栄華等が不毛の地と化してしまうような兵器を、人間が使わない理由は解るが何故ロボット達は使わないのだろうかと考えてしまう。

どうでもいいか。

いつもくだらない事を考えては中途半端に終わらせてしまう、僕の自由なライフワークの一つでもある。

それにしても、いい天気だ。

とても眠くなってきた。

眠くなってきた。

少しずつ目の前が暗くなっていく。

あれ。

僕は今何処にいるんだっけ。

気が付くとそこは闇の世界だった。

僕はこの空間をさ迷い続け遠くに光が見えてくる。

あそこが出口だろうか、闇の世界を抜けると温かい光が僕を包み込む。

何もかもが白く目が痛い、白い世界は少しずつ正体を現しどこからともなく声が聞こえだんだん近づいてくるのがわかる。

「山崎君。君の考えもわかる。だが今はその時では無い」

部屋にいた。

ああ、いつもの夢だ。

僕が赤ん坊になっているいつもの夢だ。

「速水さん！ あなたの頭脳と奥方の力があれば奴らを破壊する事が出来るはずです！」

部屋には扉が無く一つの大きな窓と、ソファーと、たぶん僕が寝ているベッドしかない。

最初この夢を見た時は忘れてしまったりよく見えなかったりしていたが、今では部屋の細かい様子までわかる。

ソファーにはスカートとトレーナーを着ている母さんと、その上に座っている幼稚園児の格好をしている幼少の姉さんがいる。

今話しをしているのは白衣を着た父と、父と同じ白衣を着た見知らぬ人。

聞き覚えの有る声だが誰の声なのかわからない、顔もモザイクが掛かっているみたいでよく見えない。

「私はゼラ博士の仇を打ちたい」

顔が見えない男のモザイク下の首元から水が流れている。

多分泣いているのだろう。

この男はたぶんゼラ博士の助手か友達だったのだろう。

ここで僕は一つの疑問を感じる。

ゼラ博士が死んだのは今から百五十年も前の話しのはずだ、だからこの夢はどこリアルでどこかリアルではない。

「山崎君。君の気持ちもわかるが、我々は政府から軟禁されている身。自由には動けないよ」

「わかっています。僕達が捕まり洗脳され敵に兵器を作ってしまったのは、人間に勝ち目は無い。奴らが恐れるのは人間が生み出す独創性ですからね」

父が男の肩に手を乗せ慰めているようだ。

話によると、ロボット達は人間を誘拐して洗脳しているらしい。

「あなた。そろそろ」

母さんが姉さんを横に座らせてから立ちあがり、僕に近づいてく

る。

母さんが僕を見つめる優しくそんな笑顔にどことなく悲しみを感じる。

「そうだな、山崎君また来るよ」

「次は来月ですね」

残念そうに白衣の男山崎君は言う、優しく母さんが僕を抱き上げる。

「ごめんね。私には貴方の体を治すことはできない」

この言葉の意味も僕には理解できない、今まで風邪はひいたことがあっても大きな病気になったこともないし現在進行形でとても健康だ。

「おやすみなさい、空」

僕の頭を母さんは優しく撫でるが、温もりは伝わってこない。

目をつぶり温もりを求めるが、温もりを感じるわけがないこれは夢なのだから。

再び目を開けるとさっきとは違う場所にいる。

こんな展開は初めてだ。

エプロンをつけた姉さんが僕の体をゆする。

「空、起きなさい」

姉さんの声が聞こえる、起きなきゃ。

「空、起きなさい」

わかつている姉さん。

「空、起きなさい」

「解っているって言ってるだろ！」

僕は大声で叫んだ。

だけど誰もいなかった。

いるわけないか、夢から覚めた僕は周りを見渡す。

誰もいなくて本当に良かった。

誰かいたら死ぬほど恥ずかしい思いをしていたはずだ。

本当に良かった。

それにしても嫌な夢だった気がする、いつもの夢から変な夢にながつて、短い夢だったと思うが良く覚えていない。

体も所々痛い、やはり外で寝るのは余り良い事では無いみたいだ。

腕時計を見るともう三時を過ぎている。

今日は家に招かねざる客人がおみえになる予定だ。

「さいなら」

僕はゆっくり立ち上がり希少な草原に別れを告げ、家に向かって歩き始める。

夢で見る父と見知らぬ人との会話の内容は、今ある僕の知識ではよくわからない、わかっていることだけを簡単にまとめると。

父と見知らぬ男は世界最後の天才と呼ばれた、ゼラッフォードラ
ン博士と知り合いで、仇を打ちたいが政府に軟禁されていてそれが
出来ないと言う事だ。

時代背景がまずありえない。

夢にしてはリアルだがやはりリアルではない。

父の仕事を知らない僕にとってはこの夢が真実かどうかなんて解
る訳が無いが、ゼラ博士と父との接点はまず無いだろう。

草原を離れマンションのジャングルを抜け一軒家の多い住宅街に
入る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5050z/>

ジェネシス

2011年12月18日12時48分発行